老朽原発うごかすな！ニュース

第１５７号

発行・老朽原発うごかすな！実行委員会

［連絡先］090-1965-7102

１１・３０高浜集会に参加して④

「原発延命」を目的とした乾式貯蔵を許すな！

『原発つづけるための乾式貯蔵ＮＯ！全国集会』、全国に先駆けて乾式貯蔵を建設させてしまった伊方原発担当（？）の一員としては、恥ずかしくって参加を躊躇っていましたが、柏崎刈羽と泊が再稼働容認に向っているいま、枯れ木も山の賑わいと思い直し、参加を決意致しました。

各地からの報告を聞いていると、乾式貯蔵は、『原発延命』という目的に対する手段に過ぎないことが明確に分かり、伊方で作らせてしまったことが悔しくて情けなくなりました。さらに木原壯林さんのお話によると、伊方原発は乾式貯蔵で１９年間延命したそうです。くらっとする年数ですが、建てさせた責任を背負って反対運動を続けていく覚悟をし、まずは現地で乾式貯蔵についての情宣チラシを配布しようと決意しました。

ちょっと前向きになった集会後のデモで高浜小学校前のモニタリングポストを見ました。３６・４ｎＧｙ／ｈでした。伊方原発付近は２０ｎＧｙ／ｈ位で推移しているので、ちょっと高いなとは思いましたが、地形もあるし風向きもあるし高浜は３機稼働しているし・・・と思いました。何を考えているのだ！高い低いじゃない！高浜原発があるために小学生が毎日被曝していることが問題だ！と思い直して怒り心頭です。さらに、高浜町の「議会だより」に、議員が『立地首長として原子力を支えていく覚悟』を問うと、町長は「日本のエネルギーを担う町としてきた歴史があるので引き継ぐ覚悟はある」と応えたとありました。彼の目は住民ではなく、国を見ているのでしょうか。首長失格です。

高浜３，４号を前に抗議

伊方ゲート前では、大分のＩさんが「原子の炎が消えていく。子どもたちの未来が見えてくる」と歌います。日曜日で誰もいない小学校の校舎に「命と未来を守るね」と誓いながら「原発反対！原発廃炉！」と声をあげました。

（伊方から原発をなくす会　秦　左子）

１１・３０原発続けるための乾式貯蔵ＮＯ！⑤

全国集会@高浜に参加して

柏崎・刈羽原発７号機に続いて、泊原発３号機の再稼働に向けての動きが、急になってきました。新聞報道には、もうこの動きは後戻りすることはなく、次は東海第２だろうとか、その次はどこかといった提灯記事ばかりが目につきます。そして原発が再稼働すれば電気代が安くなるだの、データセンターの増設で電気が足りないから原発の電気が必要だとかいった、すでにその根拠が否定されている理由をまことしやかに繰り返しています。原発が必要な理由など、実際にはこれっぽっちもありません。

ところが、福井県内各地での集会に参加するたびにひどくなっていると感じるのが、右翼街宣車による大音量の罵詈雑言です。まさに音の暴力です。そして私たちのデモの隊列にわざと遭遇するようにノロノロと車列を連ねる交通妨害がそれに重なります。彼らの狙い、それは明らかに、集会・デモ参加者と高浜町民との分断です。つまり、人々をうんざりさせること、ただそれだけのために彼らはやって来るのです。彼らの音の暴力が増せば増すほど、推進派の自信の無さが明らかになっていきます。まともな議論では、反対派に勝てないことはもうあきらかだからです。

口幅ったいことはとても言えませんが、高浜町の皆さんに孤立感だけは持ってもらいたくありません。そのために、「日本各地から、富山からも、石川からもこうして駆けつけているんですよ」と、微小ながらも声を共に上げ続けていきたいと思います。実際には、私たちも一緒に、各地からのメッセージや励ましの言葉を聞いて、福井の皆さん以上に

11・30高浜集会に参加して⑥

使用済み核燃料の行き場はない

励まされ背中を押してもらっている気持ちになります。今回は特にそうでした。それぞれ差し迫った状況に置かれているにもかかわらず、力強い言葉で運動の今を伝えようとする熱い思いが肌から伝わってくるのです。それぞれに違う今がある。でも、みんな一緒なのだと。

最近知ったことですが、志賀町の図書館にある町の歴史についての本に、志賀町高浜という町役場のある中心地区の、高浜という地名は、この福井県高浜町の漁師さんたちが古い時代に移り住んできたことからついたという説がある、と書いてありました。事実かどうかはわかりませんが、高浜同士のつながりがあったことは信じてもいいのではないかと思っています。高浜町の、浦々のたたずまいと、志賀原発近くの浦々のそれには、いつも似通ったものを感じてしまいます。どちらも、原発などとは無縁であってほしい、そんな思いを抱かせる温かみを持っているのです。

再稼働推進には何の大義もありません。ひたすら原発を存続させたい。それだけなのです。右翼共の音の暴力は、逆に、原発廃絶への道の確かさを示してくれているのかもしれません。横へ、横へと拡がり、つながっていく、その力強さを信じて、ともに進んでいきましょう。

（廃原発watchers能登・富山　藤岡　彰弘）

「百姓一揆」の旗も

大阪からはマイクロバス2台で現地へ。私が乗ったバスには大学生たちのグループもいた。座席のほとんどを祖父母世代が占める車内に閉じ込められた彼らだったが、集会後のデモでは、マイクを順番に回して元気よくシュプレヒコールをつとめてくれて、とても頼もしかった。

時間を戻す。バスはまず、高浜原発のゲート前に向かった。各方面から何台ものバスが集結し、皆降りるなりあの「反原発」の真っ赤な旗の下で「原発つづけるための乾式貯蔵やめろ」「核燃サイクルは破綻しているぞ」と声をあげ、高浜原発所員に申入書を手交し、集会会場の高浜町文化会館へ。会場ホールには400名が詰めかけた。

代表団が申し入れ

木原さんは講演で、乾式貯蔵で使用済み核燃料の貯蔵プールに空きを作り、原発の延命を図ろうとする関電の姑息さと、使用済み核燃料を持ち込もうとしている再処理工場は、全く稼働の目途が立たず、外部に放射性物質をまき散らす危険な工場だということをわかりやすく説明してくれた。日本原燃のひとたちはこんなどうしようもないところで何十年も働いていて空しくならないのか。といらん心配をした。

集会では演壇から、または動画で全国各地の闘いの状況が報告された。女川や川内原発でも原発延命のための乾式貯蔵の建設が進められようとしており、はたまた上関町では、関電の使用済み核燃料を保管する中間貯蔵施設の建設が企てられているという。結局、使用済み核燃料は、原発立地や再処理工場や中間貯蔵施設のある地域に、半永久的におし留められるのではないか。電力会社の目先の利益のために、どこかが犠牲になるようなことをこれ以上続けさせてはいけない。そのためにも、まず乾式貯蔵の建設を許してはいけない。

集会後は町内をデモ隊になって歩いた。玄関から出てくる人。戸のすきまからこちらをのぞき、手を振ると返してくれる人もいた。こういった反応が返ってくるのは長年のチラシ各戸配布の成果だろう。街宣右翼も来ていたが、言っていることがいつも支離滅裂で、帰りのバスで大学生たちが「国土を汚した原発に賛成する右翼ってなんなんですか」と会心のつっこみをしてくれた。

ほどよい疲労感につつまれたバスが新大阪に帰着すると「次は6月の大阪集会で会いましょう」と参加者みんなで再会を誓い解散した。

（高槻市議会議員　高木りゅうた）

広い会場に400人が